〈高知県立歴史民俗資料館だより・おこうふうじつ〉 第53号 2005年2月1日

縄文の土偶、弥生の絵画

―土佐市居徳遺跡の土偶と南国市田村遺跡群の絵画土器―

土偶（どぐう）は、縄文土器とともに縄文時代を代表する土製品です。土器は、衣・食・住に関わるものですが、土偶はそれらを支える精神的な糧を得るものの一つです。土偶は人の形をした土製品で、乳房など女性を特徴づける表現が多くみられます。約一万一～二千年前の草創期から晩期までみられます。その後、大陸から九州に伝播した稲作文化は、縄文文化の精神文化を変容させながら異なる世界を広げていったのです。

居徳遺跡からは、全長一八・二cm、幅一七・五cm、重さ四九〇gの顔から胸部にかけての（図①）土偶が出土していますが、実はもう一点出土しています。二頁の曽我貴行氏の『「とはずがたりに」居徳遺跡』にくわしく述べられています。その土偶は、左に乳房の残る（右は欠失）全長四・八cm、幅六・三cm・厚さ一・四cmの板状の土偶です。もう一点土偶の破片と思われる土製品も出土しています。土偶は、何らかの儀礼、マツリに用いられたと考えられていますが、多くの土偶は棄てられた状態で出土することからマツリなどを復元することは難しいと考えられています。

①土偶 土佐市居徳遺跡

②土偶片 土佐市居徳遺跡

※

南国市田村遺跡群からは、一九八〇～一九八三年の高知空港拡張整備事業に伴う発掘調査で岩偶（がんぐう）の祖霊像が出土しています。一九九六～二〇〇一年の発掘調査では、絵画の描かれた土器片が出土しています。その内の一つは、弥生土器の壺の胴部（図③・④）に描かれています。建物を描いたもので、掘立柱建物と考えられます。屋根の縁をやや太い沈線で描き、柱は上から下に描き、下部で力を入れて線を止めています。屋根には飾りらしきものが描かれています。建物を描いた絵画は、田村遺跡群からは一点のみしか見つかっていません。残念ながら建物の絵は半分以上が欠損しています。建物の床は、描かれていませんが、地面よりかなり高いか、或いは屋根にかくれているとも考えられます。収穫した稲穂を貯える倉でしょうか。倉は、秋に稲の精霊が宿るとされる稲霊（いなだま）のこもる稲の象徴と考えることもできます。

（岡本）

③建物の絵がある土器片

④描かれた建物

とはずがたりに「居徳遺跡」
―「土佐を掘る2」によせて―

主任調査員　曽我　貴行

過日、居徳遺跡群の、最後の調査報告書が刊行となった。試掘調査から数えれば平成八年度からであるから、あしかけ八年にわたった調査・整理にひとつの区切りがついたことになる。八年というと些少な年月ではないから、私の職業生活の半ば以上をこの遺跡と過ごしたことになる。あまりに長くつきあいすぎたから、その以前の遺跡との交際録が、薄れてしまったような気さえする。何とも「別格」というか、「破格」な遺跡との接触時間は、私にあまりに多くの、新鮮すぎるものをもたらしてくれたのだが、あいにく容量過小のいれものにはこぼれてしまったものの方が、とても多くて、いまでも周りはびしょびしょである。人は容器をいくつももつことはできないから、少しずつ「ごっくん」と飲み干しながら上の方をすかして、こぼれた「もったいないもの」の居場所をじりじりとつくっていこう。それまでは身の周りの「拭き掃除」とかはしないことにした。

先の企画展「居徳遺跡」（平成一三年）ならびに、速報展「居徳人骨」（平成一四年）の折にもこの紙面を汚させていただいた。まだ触れていない話題は少なくない。が、またしても縄文・弥生移行期の「特記事項」を記させていただく。

ひとつめは、「第二の」土偶が確認できたことである。高知県で「唯一」の土偶についてはすでにお披露目済みである。新たに確認できた土偶は、上半身部分の破片で、おそらく板状を呈したものとみられ、「第一」のものとはかなり趣が違う。左右の乳房の表現（片方は欠損）が判別の根拠で、他に体躯中央に縦の平行線の表現がある。頭部や両腕部、また下半身の部分は欠損して不明である。土偶には特徴の個体差がいくらかあるようで、「これ」という類品には、まだ出会っていない。可能性として、「大洞式土器」と同じ、亀ヶ岡文化の影響を想定できるだろう。とりもなおさず、「標準サイズ」の土偶が存在したことがわかったのである。このことは、「第一」の「特大サイズ」土偶1点しか確認できていなかった段階とは全く違う記述をせねばならない場所へと進んだことを意味する。おそらく、居徳にはもっと土偶があったのだろう。

ふたつめは、サルノコシカケの話題にしよう。居徳遺跡群の出土品の中には、「完形品」に近い状態のサルノコシカケがいくらか含まれており、縄文・弥生移行期に遡ると考えられる地層からのものも認められた。はかなくて、うつろいやすい、こうした有機物の資料の場合には、資料保全の観点から、科学的な保存処理という階梯を考慮する必要がある。結果論として、いくつかのサルノコシカケについては、保存処理を断行していた。今になって「ああ、良かった」と思う。その当時、どうにも迷ってしまい、当館の岡本桂典氏に逡巡をこぼしたことを思い出す。何がいいたいのか。きっかけはヨーロッパ・アルプス山中で発見された「エッツイ」、「アイスマン」等と呼ばれているミイラ遺体である。その携行品の中に「キノコ」状のものがあり、日本でいうところの「サルノコシカケ」に該当するらしい。「削られた」りして、標本的な原形を失っており、その断片は「止血剤」等の薬品として、利用されただろうと考察されている。遠く離れたヨーロッパの、しかも五〇〇〇年前の資料と、居徳との間に、何の因果

ハス

サルノコシカケ

があるのか。ないといえば、ない。しかし、ゼロでない可能性がうまれた。ゼロでないものは永遠に否定できない。それが考古資料を扱う上での公理である。ともかくも、「エッツイ」によって、私の中の「氷」がひとつ解けたことを実感する。居徳人はサルノコシカケの有用性を知っていて、これを利用しようとして、居住する場所へ持ち込んだ「可能性」があったのだ。

「弥生時代の開始年代」の話題は、今も触れないほどあつく、熱を帯びた議論が続けられている。愚者の私には難しい問題である。その端緒の当時からいっていることだが、「居徳には居徳の時間があった」ことを知って頂きたいと思う。居徳の「時計のまわり方」を、まだ私達はよく理解できていない。性急なコメントを求められることもあるが、居徳の時間を、すなわち「居徳の風日録」を綴じなおして、元の体裁に近い（と考えられる）状態にできるだけ近づけていく作業が先決であって、しかも当面終わりがない。問題は、「何によって異なる地域間の事象を横並びにさせるか」、ということであって、その際に「デジタル時計を使おう」というアイディアに全員が賛成しているわけではない、というのがその構図ではないのか。

企画展

土佐を掘る2 ―南国市田村遺跡群―

期間 平成一七年二月四日(金)～平成一七年五月一五日(日)

銅鐸・銅矛の発見

ジェット機の音響く高知龍馬空港の滑走路の北西部とその周辺に高知県では最大級の遺跡、南国市田村遺跡群があります。遺跡群の時代は、縄文時代から近～現代に及ぶものです。

この遺跡の発見は、明治時代に遡ります。明治一五・一六年（一八八二・八三）に現在の空港から北に三〇〇mほどのところにある小字正善付近の水田から、弥生時代の銅鐸（現在兵庫県西宮市辰馬考古資料館蔵）が一口発見されたのです。また、明治三二年（一八九九）には、弥生時代の銅矛五口が田村遺跡群のカリヤから発見されています。田村遺跡群の周辺部では、江戸時代の安永四年（一七七五）に現南国市大埇の関町田遺跡からも銅鐸が一口が発見されています。

昭和四九年（一九七四）に田村西見当遺跡から偶然銅鐸の舌（南国市蔵）と考えられる青銅器が発見されています。平成八年から一三年の高知空港第二次拡張整備事業に伴う発掘調査では、発掘調査中に初めて埋納坑に納められた①の銅矛が出土しました。南国市では他に十市遅倉遺跡からも偶然銅矛が出土しています。この銅矛も埋納坑に納められたものでした。

①銅矛 南国市田村遺跡群

田村遺跡群発掘史

南国市田村西見当から弥生土器が出土することを報じたのは、郷土史家浜田春水氏です。この発見により昭和三〇年（一九五五）に高知県教育委員会は、初めて田村遺跡群の発掘調査を行いました。この調査で弥生時代前期の土器や土坑が発見され弥生時代前期の遺跡であることがわかり、調査した小字名から西見当遺跡と称されるようになりました。昭和三八年には、西見当遺跡の東で見当遺跡の発掘調査が行われました。昭和五一年（一九七六）には、西見当遺跡の発掘調査が再度行われ、貯蔵穴や小竪穴跡、環溝の一部と考えられる溝跡もみつかりました。西見当遺跡の発掘調査で、この遺跡が弥生時代前期の環溝集落跡で、香長平野ですでに弥生時代初めから集落が営まれていたことが知られることとなりました。さらに、西見当・見当遺跡の周辺には、小字による遺跡名で呼ばれる城・カリヤ・北カリヤ・カリヤ西遺跡が所在しており、弥生時代前期から中期の遺跡

②水田跡

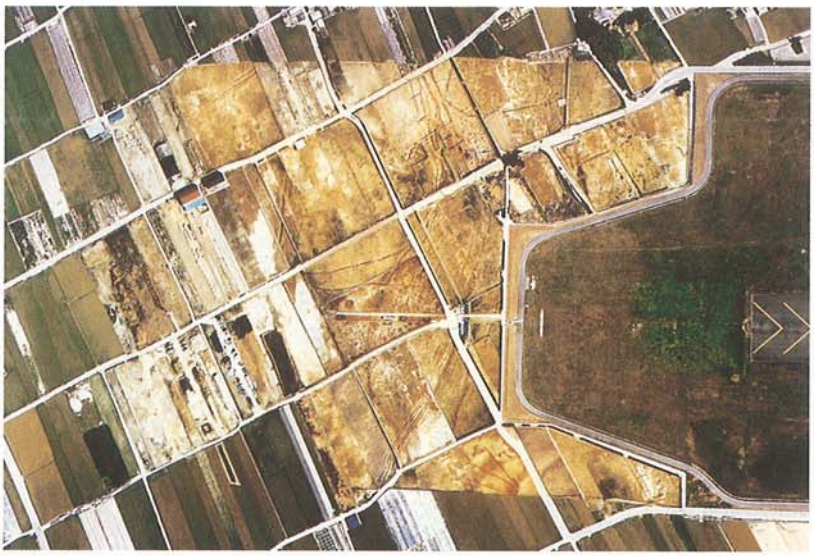
の広がりが確認されました。

今から二〇年前に行われた昭和五五年～五八年（一九八〇～一九八三）の高知空港拡張整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査によりこれらの遺跡が大きな集落遺跡に含まれることが明らかになり、総称して田村遺跡群と呼ぶようになりました。このときの調査で県内では最古の弥生時代前期の集落跡が確認され、集落跡の北からは県内で初めて②の前期水田跡が発見されました。その数は、二二四枚で二～四ｍの小区画の水田跡でした。この調査では、弥生時代だけでなく、中世の環溝屋敷跡が発見され、全国的に注目されました。その一六世紀の集落を復元したものが歴民館の総合展示室中央にある大きな模型です。

中世の環溝集落跡

高知空港第二次拡張整備事業に伴う田村遺跡群の発掘調査

平成八年から一三年にかけての高知空港拡張に伴う発掘調査は、滑走路が延長される南東部で行われました。調査成果については、埋蔵文化財センターで纏められ、現在も研究が続けられています。その成果の一部を紹介しましょう。縄文時代では、田村遺跡群が縄文時代前期に遡ることが明らかになりました。弥生時代では、二重または三重の濠のある弥生時代前期の環濠集落跡が確認され、中期から後期の弥生時代の集落の中心部も確認されました。確認された遺構は、竪穴住居跡約四〇〇棟以上、掘建柱建物跡二〇〇棟以上、土坑約二〇〇〇基以上、溝、流路などがあります。遺物は、多量の土器や石器、青銅器、鉄器、ガラス製品などコンテナケース約五〇〇〇箱に及びます。今回の調査で先述した銅矛と銅矛の破片がもう一点出土しています。また、鏡片や銅釧片なども出土しています。また弥生人精神生活を知ることのできる人面動物形土製品が発見されています。さらに、土器に絵を描いた絵画土器が出土しています。建物を描いたもの、生物を描いたものなどがありますが、はっきりと画材がわかるものは少ないようです。

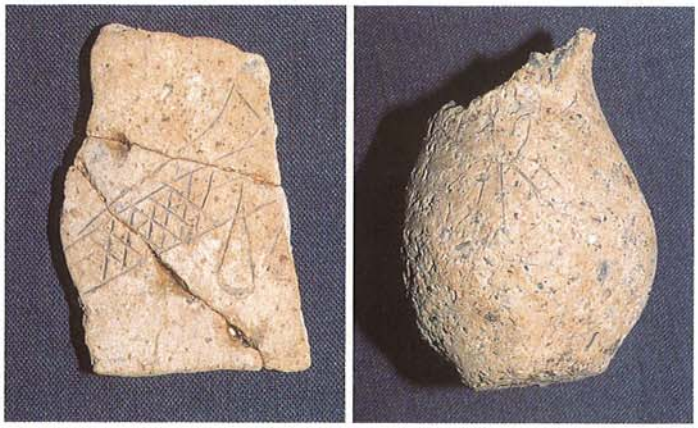


田村遺跡群　全体の航空写真

人面動物形土製品

古代では、コの字状に廃された掘建柱建物跡が確認されており、その時期は八～九世紀のものと考えられており官衙的な建物群と考えられています。中世では、環溝屋敷跡の一部が確認されており、中国製青磁碗や備前焼擂鉢などが出土しています。近世では　田村は農村として発展していきますが、その様子が土坑や墓の存在から窺われます。企画展「土佐を掘る2」では、土佐市居徳遺跡・南国市田村遺跡群出土資料や二〇年前の田村遺跡群出土資料なども展示を予定しています。

（岡本）



絵画土器

写真は(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター提供

職場体験

学芸員にチャレンジ

南国市立北陵中学校

平成一七年一月一八日(火)・一九日(水)に南国市立北陵中学校二年生の四名が職場体験学習で来館しました。北陵中学校の職場体験は今年で四年目を迎えます。今年の職場体験は二日間でしたが、四人の生徒は真剣に取り組むことができました。

初日は、受付と学校対応の業務に従事しました。受付業務は二名一組で受付での接客業務と展示室での監視を体験しました。受付業務は、来館者が来たらどうしよう、大きな声が出るだろうか、などかなり緊張したようです。午後、土佐市立高岡第二小学校五・六年生が来館し「土佐を掘る1」の展示解説後、勾玉づくりの体験を行い、その体験に指導者として加わりました。小学生の各班につき、作り方の指導に当たりましたが、小学生への指導は初めてなのか、最初は戸惑っていました。時間が経つにつれ、形や削り方についてアドバイスができるようになり、来館者への対応について、ひとつ貴重な体験ができたと思います。

勾玉の作り方、教えます

二日目は、三月四日から始まる「土佐を掘る2」に向けて、実物資料の取り扱い、展示資料のレイアウトづくりを行いました。まず、田村遺跡出土の木製品を報告書と照らし合わせる確認作業を行いました。そして、館の職員より展示する資料を二点抽出してもらい、展示作業に取り掛かりました。

まず、与えられた資料について調べなくてはなりません。資料室や体験学習室の図書を利用し、「椀」や「桶」について調べました。調べていくと、桶の把手は井戸の釣瓶であることが分かりました。生徒にとっては貴重な発見です。そして、調べた内容をまとめ解説パネルを作成し、来館者により理解してもらうためイラストも作成しました。レイアウト作りに先立ち、見やすい・分かりやすい展示を目指し、展示室を回り、事前学習を実施していました。生徒にとっては納得いく解説パネルができたと思います。

資料を前に、調べ学習

期間が二日間と短く、やっと館の雰囲気に慣れ始めたところで職場体験学習が終了です。実施期間の調整が今後の課題として残りました。

最後に生徒の感想の一部を紹介します。

・歴史民俗資料館では、どんな仕事をするのか学ぶことができた。(西川)
・二日目は、よく仕事ができたと思う。すごく勉強になった。(山下)
・勾玉の作り方を小学生に教える体験ができてよかった。(梶原)
・社会に出た時、仕事の大切さもわかった。(石川)

来館校紹介

土佐市立 高岡第二小学校

平成一七年一月一八日に土佐市居徳遺跡の地元の小学校、高岡第二小学校五・六年生三十名が来館しました。

巡回展「発掘された日本列島二〇〇四」地域展「土佐を掘る1」の開催期間中で居徳遺跡より出土した人骨、土偶、木製品などの展示資料の解説を担当学芸員より行いました。

子ども達はメモを取りながら熱心に解説を聞き、居徳遺跡は全国どこに行っても誰もが知っている有名な遺跡である説明に郷土の遺跡に誇りを持つことができたと思います。

解説終了後は、勾玉作りを体験し、古代人の暮らしに想いを募らせることができました。

展示解説を聞く子ども達

今回、送迎に使用したバスは、吾川郡・土佐市の小中学校が歴民館を利用し学習するために準備したバスです。(泉)

展示施設紹介

高知県立埋蔵文化財センター

今回の企画展「土佐を掘る2」は、高知県立埋蔵文化財センターと共催となっています。そこで、南国市に所在する高知県立埋蔵文化財センターを紹介したいと思います。調査第一班長山本哲也さんに案内していただきます。

山本　この建物は、平成一三年に新たに完成しました。埋蔵文化財の調査・研究のために設置され、発掘調査を通じて埋蔵文化財の保護と普及を図り地域の文化の振興を目的としています。その一環として、本館に展示室が設けられています。

岡本　展示について紹介してください。

山本　一二月一五日～平成一七年三月三一日まで常設展「土佐の歴史散歩」を開催しています。旧石器時代（奥谷南遺跡）から近世（高知城）までの考古資料を約五〇〇点展示しています。

岡本　展示資料を紹介してください。

山本　縄文時代では、香北町の縄文時代早期の刈谷我野（かりやがの）の厚手無文土器や石器があります。

岡本　早期の土器で復原されている土器は珍しいですね。

山本　弥生時代では、南国市田村遺跡群の土器類や石器などが、古墳時代では土佐山田町伏原大塚古墳の須恵器や円筒埴輪などを展示しています。

岡本　古代以降の考古資料は何がありますか。

山本　古代では、紀貫之が土佐に来たころの土器類、つまり食器類などを展示しています。中世では、南国市の長宗我部氏の居城跡、岡豊城跡から出土した瓦類や陶磁器片などを展示しています。近世では高知城跡関係の資料を展示しています。

展示室

問い合わせ先
〒783―0006　南国市篠原一四三七―一
高知県立埋蔵文化財センター
TEL〇八八―八六四―〇六七一
観覧料　無料
開館日　平日
（土・日曜日、祝祭日は休館）
開館時間　9時～17時

［交通］
ＪＲ後免（ごめん）駅から車で10分
土佐電鉄「住吉通り」から南へ徒歩10分

土佐の民具16

イナキ

坂本　正夫

稲穂を束ね穂を下にして掛け乾燥させる施設を土佐ではイナキ（稲木）と呼んでいますが、これはイネカケ（稲掛け・稲架）の古語です。

稲刈りの時期は早稲（わせ）、中稲（なかて）、晩稲（おくて）の種別や平野部、山村などの違いで異なりますが、その乾燥法にはヂボシ（地干し）、クロヅミ（クロ積み）、イナキの三つがありました。

ヂボシはカリボシ（刈り干し）とも呼ばれ、刈り取った稲をそのまま田の中で干す方法で平地農村やその近辺でみられました。今は刈り取った稲をそのまま脱穀しますが、以前は地干しした稲を束ねてクロ（積み重ねて高くすること）にするのが普通でした。稲束は穂の方を内側にして円筒状に積み、最上部には防水用のスボと呼ぶ藁束をかぶせていました。

イナキは田の中に長い棒を三、四メートル間隔ぐらいに立て、これに横木（竹を使用することが多かった）を渡して稲束を掛けるもので、主に中山間地域でおこなわれていた方法です。横木は五、六段から十段ぐらいあり、柱と柱の間をマドと呼んでいましたが、大百姓になると十マド以上もあるイナキをつくることもありました。また横木が一段か二段の簡易なイナキをセマチ（田の一区画）ごとに作っていた地域もあります。

なお、中山間地域ではキビ（とうもろこし）のイナキ、麦のイナキ、ソバのイナキなどもみられました。

吾川郡池川町楮原で見かけたイナキ
（1969年）

高岡郡仁淀村大植で見かけたキビのイナキ
（1964年）

考古

第二十九番札所 国分寺の境内図

『岡豊風日』第47号で安田町第二十七番札所神峯寺について、調査時の所見を述べたことがありました。現在の札所寺院の中からかつての四国遍路の足跡を探すことはなかなか難しいことです。土佐国分僧寺跡の発掘調査の時に、札所に参詣した人々の踏み固めた参道跡を発掘したことがありました。それは、仁王門から金堂にいたる直線の現参道下からみつかりました。二層から三層の参道の跡が、土層断面から観察されました。考古学的に調査してみると意外と遺構が残っていることが明確になりました。中世までは遡ることはできませんでしたが、近世の遺構を確認できたことは幸いでした。近世考古学の一つの成果です。これらの調査に有効なものに寺の伽藍図があります。土佐の寺社にはあまり社寺の図が残っていませんが、国分寺には境内図が六枚残っています。この境内図には、現在はない堂などが書かれています。これらの境内図は、札所の法燈の展開も物語ってくれています。

（岡本）

国分寺境内図

歴史

きえかけた文字を読む 板絵両界光明真言曼荼羅の墨書

特別展「土佐国分寺―四国八十八ヶ所霊場①―」に板絵両界光明真言曼荼羅二面を展示しました。この板絵両界光明真言曼荼羅は円形の板に描かれ、二面とも直径二メートルを超す大きなもので、裏面に墨書が残されています。胎蔵界には、時代を異にした墨書が二ヶ所に見られます。墨書より、慶長年間に制作、又は寄進されたこと、明治三年に善楽精舎（善楽寺）の茶庵に置かれていたことがわかりました。また、金剛界には、全面に短い文章で墨書が残されており、文化一四年に寄進されたこと、施主などが判明しました。そして、明治四年の廃仏毀釈のおり、板絵両界光明真言曼荼羅二面は、土佐神社から国分寺に移されたことがわかりました。二面とも長い年月を経ているため、まだ判読できない墨書があります。今後、赤外線を使い、消えかけた文字を読むことにより、板絵両界光明真言曼荼羅の新たな歴史を知ることができるかもしれません。

（泉）

板絵両界光明真言曼荼羅
胎蔵界裏面

民俗

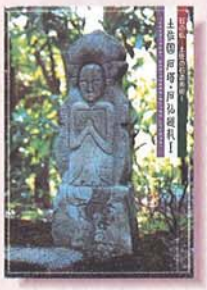
人形谷を歩く 復活！十市土人形

昨年一〇月一七日、南国市十市の民俗を研究する「春峰会」主催の「十市山辺の道探訪ウォーキング」にお招きいただき、十市土人形の話をしました。十市土人形は、土佐の代表的な土人形で、シンプルで明るい彩色や優しい表情が特徴的です。また、土佐で戦前に遡る土人形の産地は、十市の人形谷以外に確認されていません。かつては全国各地で作られていた土人形ですが、今や多くの産地が廃絶し、郷土玩具の収集家から惜しまれています。そんな中、人形谷では十市土人形を焼く「でこ窯」が作られました。何かしら発見がある十市行。前回は人形谷の土の良さに触れ、人形の型や「傘持ち娘」、「尉と姥」の人形を拝見しましたが、今回も「恵比須・大黒」に出会うことができました。当館は城田政治氏郷土玩具コレクションに「山姥」等の十市土人形を収蔵しており、当地とは浅からぬご縁があります。地元の皆さんの活動を少しでもお手伝いできれば、と考えています。

（中村）

恵比須・大黒

刊行物のご案内



石の仏
—土佐の石造美術Ⅰ—
土佐国石塔・石仏巡礼Ⅰ

本年春の企画展「石の仏—土佐の石造美術Ⅰ—土佐国石塔・石仏巡礼Ⅰ」の図録。土佐の層塔から板碑・五輪塔・宝篋印塔・石仏などを掲載。拓本も収録。

A5版 64頁 頒価800円（送料1冊210円）

土佐国分寺
—四国八十八ヶ所霊場①—

平成16年秋の特別展の図録。国分寺の創建から近世・近代の国分寺の歴史を物語る重要文化財の薬師如来や両界曼荼羅などの指定文化財などをカラーで掲載。論攷編も収録。

A4版 134頁 頒価1,050円（送料1冊340円）

高知県立歴史民俗資料館研究紀要第13号

［調査報告］
土佐の長太刀について ……小笠原信夫
室戸市中道寺所蔵の伝日蓮真蹟について ……寺尾 英智
坂本龍馬湿板写真の調査経緯について ……三井圭司・山口孝子
土佐・石造塔婆・石仏研究史Ⅰ —板碑— ……岡本 桂典
長宗我部元親の右筆とその周辺 ……野本 亮
「お化けポスト便」から —妖怪・幽霊アンケート資料集— ……梅野 光興 編

A4版64頁 頒価400円（送料290円）

館受付で販売中。郵送希望者は送料とあわせて現金書留か郵便振込でお申し込みください。

口座番号 01610-2-61369
加入者名 （財）高知県文化財団

岡豊風日（おこうふうじつ）第53号
平成一七年二月一日
編集・発行 高知県立歴史民俗資料館
〒783-0044 南国市岡豊町八幡1099-1
TEL 088-862-2211
FAX 088-862-2110

開館時間 午前9時～午後5時（入館は午後4時30分まで）
休館日 毎週月曜日（祝日及び振替休日にあたる場合は翌日）年末年始、臨時休館日あり
入館料 通常期「常設展」大人（18歳以上）450円・団体（20人以上）360円
無料：高校生以下、高知県及び高知市長寿手帳所持者、療育手帳・身体障害者手帳・障害者手帳・戦傷病者手帳・被爆者健康手帳所持者とその介護者（1名）

印刷・㈱飛鳥

歴史民俗資料館ホームページアドレス・Eメール
http://www.kochi-bunkazaidan.or.jp/~rekimin/
Eメール：rekimin@kochi-bunkazaidan.or.jp

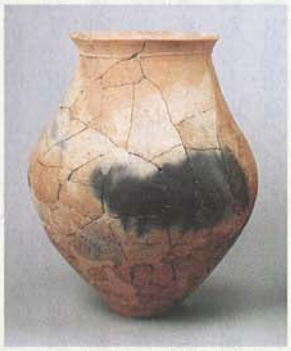
平成17年2月～平成17年5月の催し物

企画展
「土佐を掘る2」
平成17年3月4日（金）～平成17年5月15日（日）
1階企画展示室

高知県内では、毎年約50件近くの埋蔵文化財の発掘調査が行われ、その成果はマスコミや現地説明会を通していち早く県民に広報されています。

今回の企画展は近年発掘調査の成果の中で注目される出土品を中心として展示し、埋蔵文化財に触れることにより、文化財保護に理解を深めてもらうことを目的としています。

土製耳飾り 土佐市居徳遺跡


壺 南国市田村遺跡群

今回の企画展「土佐を掘る2」は、「土佐を掘る1」に続く考古展の第2弾です。「土佐を掘る1」で紹介できなかった土佐市居徳遺跡の出土遺物、空港拡張に伴い近年調査された南国市田村遺跡群の出土遺物などを展示紹介します。

また約20年前の高知空港拡張に伴い1980～1983年に発掘された田村遺跡群の資料も展示し、田村遺跡群の歴史をふりかえります。

講演会

演題：「土佐発掘物語2－南国市田村遺跡群－」
（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター 主任調査員 坂本憲昭 氏

平成17年3月5日（土） 14:00～16:00

会場：2階AVホール

定員100名（先着順） 葉書かEメールで住所、氏名、電話番号をご記入のうえお申し込み下さい。

展示室トーク

平成17年3月19日（土） 午後2:00～3:00
会場：1階企画展示室
解説：当館学芸員
＜申込は不要です＞

入場料	大人（18歳以上）	団体（20人以上）
▶常設展	450円	360円
▶土佐を掘る2（常設展込）	450円	360円